

新・道徳哲学——スミスから現代へ

大村 照夫

目次

- はじめに
- I 道徳哲学の歴史
- II 道徳哲学の概念
- III 経済における道徳哲学
 - (1) 不況
 - (2) 勤勉
 - (3) 節約
- IV 暮らしにおける道徳哲学
 - (1) 家族
 - (2) カード社会
 - (3) いじめ
 - (4) 虐待
- V 感情における道徳哲学
 - (1) 怒り
 - (2) 快樂
 - (3) 思いやり
 - (4) 嘘

はじめに

道徳哲学の歴史は古いが、意外と中身は変わっていないのは不思議である。人類の歴史は古い、それと同じだけの歴史を持っているにもかかわらず、進化していないと思われがちである。例えば勤勉は今も昔も尊重される。それは勤勉が美徳であるのではなく、人間は勤勉よりも怠惰を選ぶ傾向にあるから、美徳なのである。人類が怠惰よりも勤勉を選ぶ傾向にあるならば、街は物やサービスに溢れ国は休息令を出さざるを得ない。この場合、勤勉は美徳ではなく怠惰が美徳となる。しかし自然は十分な物を

用意してくれていないのでいかに勤勉であってもあり余る食料や便宜品は用意できない。怠惰に対する選好が大きい程勤勉が美徳として賞賛される。勤勉に対する需要が大きいから今も昔も勤勉が美徳となる。

道徳哲学も道徳に対する需要と供給によって美徳であったり悪徳となる。この傾向は商品の価格と同様に希少価値に対する需要が価格を高騰させる。道徳も商品と同じように希少価値によって美徳や悪徳に変化する。徳といえども普遍なものはない。この視点から従来の道徳哲学を再検証してみよう。意外と不合理と思われた道徳哲学が合理的であったり、役立つと思われ

る習慣が不合理であったりする。

I 道徳哲学の歴史

道徳哲学という言葉には何かしらとっつきにくい雰囲気がつきまとう。どうやら道徳という固苦しいイメージと哲学というえたいの知れない概念がくっついているせいだろう。道徳というと倫理学や宗教学を連想し、思わず飲み屋やパチンコ屋へふらっと入るのをためらいがちである。できれば避けて通りたい学問分野ではある。その道徳が哲学という重たい分銅で押しつけられると、通常の人にはもう嫌悪感を懐くどころか、無視してしまう。現代人はこのやっかいな道徳哲学を様々な学問分野の外に追い出し、自分達にとって都合のいい学問分野、つまり我々の生活に役立つ学問分野だけを追求してきた。確かに現代社会は豊かになり、便利になり、楽しくなった。快楽を追求する様々な工夫がほどこされ、社会は快楽のるつぼと化している。

しかしこのいかめしい道徳哲学も歴史を振り返れば、ごくありふれた学問分野であった。『国富論』（1776年）の著者アダム・スミスは恩師ハッチソンの死によって運よく母校グラスゴー大学の「道徳哲学」の講座を担当できた。当時の道徳哲学は今日で言えば、社会科学に該当する広い学問分野であった。つまりこの道徳哲学は神学から法律、政治、経済までも含む幅広い学問分野であった。まだ学問は専門化しておらず、様々な学問分野が未分離のまま総括的に統合されていた。むしろ学問の各分野が相互に関連して切り離せないといった方がいいのかもしれない。そして当時はキリスト教が社会の学問分野の中心に位置していた。つまり近世ヨーロッパ社会はきわめて教会主導型の世界であり、従属、徳、博愛を重視する自然神学が学問の頂点に君臨していた。だから道徳哲学が神

学という一宗教によって統合された社会科学として存立した。

スミスは従来の道徳哲学体系に満足しなかった。道徳哲学の講座は、第1部門、自然神学、第2部門、倫理学、第3部門、法学、第4部門、経済学、という秩序で構成されていた。つまりキリスト教を頂点とした伝統的秩序の中世的学問体系であった。スミスは国民の幸福は生活の安定と豊かさであるという近代的発想から、道徳哲学の秩序を逆転させる。国民は君主や教会のために犠牲になったり奉仕するのではなく、自分のためや家族のために仕事をする。伝統的秩序は実質的秩序に転換する。つまり従来の道徳哲学の秩序を逆転させ、第1部門に経済学、第2部門に法学、第3部門に倫理学、第4部門に自然神学を置いた。人々は各自で自由な経済活動に励めばいい。教会や君主に奉仕する必要はない。契約違反や約束違反は厳しく罰せられる。そして社会の潤滑油として第3部門の倫理学が尊重される。そして中世社会では頂点に位置した自然神学は最後尾に置かれる。第4部門の自然神学はほとんど研究する必要のない学問分野に低下してしまう。

スミスはこの逆転の発想により『国富論』を出版し、経済学の父と呼ばれる。彼は従来の道徳哲学の底辺に位置した経済学を社会科学における独立科学の位置に高めた。

このでき事をきっかけに道徳哲学の学問体系は様々な学問分野に分化し、専門化していく。そして道徳哲学はやがて倫理学に限定されていく。

II 道徳哲学の概念

近世においては道徳哲学は、キリスト教を頂点として倫理学、法学、経済学まで含んだ幅広い学問体系であった。キリスト教、倫理学は学

問体系の中心に置かれる脚光をあびた学問分野であった。しかしイギリスの産業革命の成功によって生産力が飛躍的に向上し、生産は手工業から機械工業へと進化をとげると同時に機械生産によって得られる豊かな生活物資を享受できるようになり、従来の学問体系は生活の向上を求める実質的な学問体系に変化する。経済学が第一に脚光をあびることとなる。

そのため従来の道徳哲学はその地位を低下させ、倫理学に限定されてしまう。社会は経済学と法学が支配し、倫理学や自然神学は社会科学の片隅に追いやられてしまう。しかし社会は政治や経済だけで回っている訳ではない。生活の端々に宗教や倫理学が社会の潤滑油として機能している。いかに倫理学（道徳哲学）の地位が低下したとはいえ、社会生活を営む上では重要なファクターであり、決して忘れてはならない学問分野である。むしろ潤滑油としての道徳哲学が欠除すると社会の政治経済は機能しなくなる。例えば愛国心がなければ戦争に勝てないだろうし、勤勉という道徳心がなければ国の経済は滅ぶ。

家庭を持つ人は妻や子供のために職場で一生涯懸命働く。働く意欲は温かい家庭の食卓やテレビ鑑賞から生まれるのである。家庭生活が安定していないと仕事も手につかないし、職場もうまくいかない。職場がうまくいかなければ社会も回らない。社会がうまく回転するためには、社員の賃金の保証はもちろんであるが、社員の家庭生活の安定が大前提である。妻は時給いくらで夫の食事やお弁当を作っている訳ではない。少しでもよい仕事をしてもらおうという気持ちから心を込めてお弁当を作る。この美德はなかなか真似のできない徳である。

道徳哲学は中世キリスト教会では社会科学の中で中心的な位置にあったが、現代では全く研

究されることのない学問分野に地位を低下させてしまった。しかし今こそ現代文明に忘れかけた道徳哲学を注入することによって現代の道徳の欠除によってひずんだ社会を円滑な社会に戻すことができるのではないか。中世社会はきわめて教会中心主義の社会であり、人々の自由はほとんど無かったが、現代人は逆に教会や領主から解放された自由人である。自由人でありすぎる余り法の網すらくぐり抜けて自由過ぎる社会活動に専念する人も多い。忘れられた道徳哲学を現代の社会科学に組み込むことによって一層強力な社会の枠組みが形成されるだろう。

III 経済における道徳哲学

スミスによって確立された経済学は資本主義の潮流となり、従来の博愛や友愛精神は私欲や貯蓄心に替わり、企業の生産性が最優先し、企業の競争力が国富を増加させた。しかし生産性の向上は時として滞貨を招き、好況と不況を繰り返す。

(1) 不況

資本主義社会に不況はつきものである。不況は経済が資本主義の道を歩む早い時期から発生している。既にイギリスでは1800年初頭に不況を経験している。しかし当時は不況の原因がわからず、滞貨はどこかに財貨の不足があるはずであると考えられた。また農業中心の産業社会では生産された商品が売れ残るということは考えられなかった。イギリスの産業革命が成功したとはいえ、きわめて低い生産力の社会では生産力が購買力を上回るという発想はなかった。

しかし経済の実態はいつも経済理論に先行し、なかなか追いつかない。経済理論の主流には生産が消費（購買力）を保証するというセイ法則があったためである。そのため1900年代

に入って積み積もった不況の山が世界恐慌に発展した。不況の原因が有効需要の不足にあるということはマルサスやケインズによって早くから指摘されていたが、世論は耳を貸さなかった。大恐慌を経験してはじめてケインズ理論が採用され、ニューディール政策が世界恐慌の危機を救った。

資本主義に伴う一般的不況の原因が財貨に対する需要の不足にあることがわかったが、その対策として国家の役割が増すことになる。政府による公共事業や社会保障が増加し、国家は慢性的な財政赤字をかかえることとなる。資本主義社会が好況を保つには政府の後押しが不可欠となる。表現を代えれば、民間の余剰財貨やサービスを国は国債の発行や国有財産の売却によって買われることになる。サービスの中には浪費や無駄使いと揶揄される公務員の手当てが多く含まれている。

資本主義社会はその名の通り資本家が牽引する。資本主義社会は資本家の気分によって左右される。基本的には資本家は貪欲な人である。どおしても物を作り過ぎてしまう。少し売れるともっと売れるであろうと思うのである。こういった資本家の行動が堆積すると滞貨が発生する。資本家は常に売れゆきを見て生産を調整しなければならないが、売れゆきの予測が一番むづかしい。不況は労働者の責任ではなく、資本家の利潤に対する飽くなき欲求にある。資本家がほどほどに生産すれば、不況は回避できるであろう。ただし経済成長は遅い。資本家には節度ある企業倫理が求められる。資本家に求められる道徳哲学は彼の利潤追求の節度ある調整である。この道徳哲学が確立しないために社会は不況に悩まされ翻弄される。

資本家の利潤追求の動機は経済成長の原動力であるが、どおしても過剰になりがちであると

ということがわかったが、もう一つ資本家の悪癖があげられる。それは資本家が吝嗇であることである。つまり自分が手に入れた利潤を投資も散財もせずに、ひたすら貯め込んでしまうことである。お金というものは貯め込まれると回らなくなり、景気の足を引っ張る。資本家は獲得した利潤を貯め込まずに、設備投資にとどまらず、従業員の福利厚生や社会貢献にもっと使えば、社会の需要は喚起され社会は活気づく。儲けたお金を社員に還元する社長は少ない。ほとんどの社長は儲かったものを貯め込む。この行為が不況を一層深刻なものにしている。資本家のもう一つの道徳哲学は利潤を社会に還元することである。もし社会の富裕層が富を遊びや福祉にもっと向けてくれれば、不況は回復し、貧困や格差は縮小するであろう。

(2) 勤勉

イギリスは愛国心と勤勉で産業革命を成功に導き、世界を制覇した。アメリカもヨーロッパを追われたプロテスタントの勤勉と愛国心で今日の世界を指導している。

日本もイギリスやアメリカに負けずとも劣らず勤勉な国民である。勤勉とは非常にむづかしい徳性であり、ほとんどの人が怠惰を選ぶ。遊びたい盛りの子供を机に座らせるのは人並みに生活できる大人に育てて欲しい母の愛である。勤勉が道徳として定着しているのは、勤勉が怠惰よりも敬遠されるからである。労働に慣れないと生活していけない現実を母は無言で子供に教える。

そのため勤勉や努力が道徳の頂点に置かれ、博愛よりも尊重される。怠惰な人や遊び人ばかりでは社会は成り立たない。怠惰でいられるのはアラブの石油王が莫大な遺産を手にした人達だけである。どんな社長も創業当時は人並み以

上の努力をしている。

勤労はうまくいけば多大な成果をもたらすが、怠惰は欠乏以外の何も残さない。「家宝は寝て待て」と諺に言われるが、これは相当の努力や苦労をした人について言われることで、何もしないでただ待てという意味ではない。

特に発展途上国の人達の勤労意欲は低い。それは生活の向上を目標としないからである。そこそこの食料と水があれば生活できるので何故今以上働かなければならないのかと不思議がる。だから先進国の援助は、現地に学校を建て、勤労の尊さをまず教えるのである。

他国との交流のない孤立国においては労働（勤労）は全て国内で調達される。したがって労働力は余すところなく利用される。しかし資本主義社会の資本は利潤を求めて移動する。日本も海外の安い労働力を求めて工場を東南アジアにシフトしている。そのため日本の労働市場は空洞化し、単純労働は雇主を失う。企業は安い労働力を求めて海外進出し、日本の労働市場は雇用不安をかかえ、失業と低賃金を慢性的にかかえ込むことになる。

日本の労働者には高度な技術と知能が求められるが、企業の要求に応えられる労働者はごく一部分である。ほとんどの労働者はそれほど特殊な能力や技術を持ち合わせていない。しかし勤勉さと基礎学力と器用さとは持ち合わせているから、海外の労働者よりはるかに労働力としては優秀である。しかし企業にとっては高賃金は競争力を失う。

海外生産もやがて現地の経済成長によって賃金率も上昇し、日本企業も安い労働力に対する魅力がなくなる時代が来る。為替レートも切り上げられ、日本企業は工場を日本に戻すか、あるいは更に賃金の低い発展途上国に移さざるを得ない。日本企業は低賃金を求めて粗悪品を作

ることなく、徹底的な機械化(ロボットの導入)と合理化で日本に工場を戻してもよい。日本企業が国内で生産を再開すると雇用は安定し、地方も活性化する。労働市場は活況を呈する。しかし企業は高賃金を支払わなければならないから国際競争力に勝つためには質の高い労働が要求される。もちろん生産ラインもロボット化し、農業においてもロボットの導入によって重労働から農業従事者を解放しなければならない。

日本人の勤勉は世界一である。確かに労働が苦痛や克己心を伴うことは事実であるが、仕事好きの日本人はそれを苦痛とは思わず生きがいと感じる。生きがいは労苦に耐える辛労や辛苦に比べて遥かに生産性が高い。

子供の生きがいは晩ごはんの自分の好きなおかずであり、自分の好きな夕食に出会うと万歳を叫ぶ。単純である。犬の晩ごはんときほど変わらない。

大人の生きがいは多様である。病人の生きがいは病気が治ることである。貧乏人の生きがいは人並みの生活ができることであり、富者の生きがいはチャリティで恵まれない人々の笑顔を見ることである。

盗人の生きがいは大金をわからないように盗むことであり、スリの生きがいは公衆の面前で堂々と紳士の財布を抜きとることである。しかしこれらの行為はいかに上手であっても勤労やいきがいは言えない。

誰にも各自の生きがいがある。生きがいがあるから明日への生きる意欲が生まれる。生きがいは明日に向かって生きる活力である。生きがいが無くなると人間は生きる気力を失う。気力を失うと毎日の生活が嫌になり、何をやっても充実感（勤労意欲）が無くなる。

生きがいは人に言われて見つかるものではなく、自分で見つけるものである。病気だつて明

日には改善すると期待しなければ闘病生活は長続きしない。失業中の人も明日には仕事が見つかるかと期待しなければ、ハローワークへ通えない。

今日の仕事に何かしら新しいものやレベルの高いものが見つかったと、明日の仕事が楽しみである。勤労は生きがいに変わる。病床に伏している人もどこか今日の気分がさわやかだと明日への生きる気力が生まれる。少しのレベルの向上を見つける努力が病人の勤勉である。そしてこれを足掛かりにして明日への生きがいにすべきである。この着眼点を見失うと彼は行き先を見失う。人間は生きがいを見失うと勤勉に対する気力も失せる。勤勉が生きがいと一致する人は成功する。

(3) 節約

節約は美德であるという格言はいつの時代にも健在である。特に生産力の低い昔においては特に尊重される徳であった。食事の時も残さず食べるように心がけ、靴下に穴があけば穴をつくろってはいたものである。しかし豊かに品物が店先に並び安価に手に入ると、食事もダイエットを意識して残し、靴下も新品ととりかえる。これらの行為は確かに節約には反しているが誰も非難しない。

今日の節約は電気や水道あるいはガソリンに向けられている。節電や節水によって環境保護を目的とするものになりつつある。地球の人口増加と開発途上国の生活水準の向上が原因である。

貧困層は相変わらず節約を強いられる。彼らこそ節約という美德の持主である。彼らにはこの美德を忘れると生活できないのである。スーパーの特売品や賞味期限近い食品を安く買い、食費を切り詰める。風呂も毎日に入らず、新聞

も取らない。世間から見放された生活を余儀なくされる。彼らは人並みの生活を目ざして儉約に励む。

日本の伝統的節約の精神は経済の成長期には企業の資金調達に貢献するが、今日のもの余りの低成長期には経済の足を引っ張る。貧困層は仕方ないとして、富裕層は節約してはいけない。貯金通帳の入金欄に零が増えていくのを楽しんではいけない。しかし富者に消費を強要できないから、国は相続税で片寄せた富を取り上げるのである。人は1億円以上の貯金ができると吝嗇になると言われるが、このような節約はしないようなボランティア社会やチャリティー社会を形成することも必要である。

IV 暮らしにおける道徳哲学

(1) 家族

社会を構成する最小単位が家族である。家父長的家族制度が長く続いたが、今日ではその形態は実質的にも法的にも崩壊した。生産力の増加と民主化の中で自由な家族制度が生まれた。その要因は雇用である。昔は一家の長が働き家族を養ったが、今日では家族の誰もが働ける場がある。主婦といえどもスーパーのレジ打ちからケーキ作りまで、幅広い雇用に恵まれている。いきおい戸主の力が弱まり発言力も弱まる。昔のように父の一喝によって家族は動かない。話し合いと調整によって一家の方向性が決定される民主的家庭となった。これはひとえに日本の経済力が強くなった証拠である。しかしその分家族制度が維持できないという弊害もでて来た。家族は子供達が自分の好きな職を選んで家を去り、大きな家に父母二人の暮らしが多い。また都会では一人暮らしの若者や老人が狭い空間で生活している。いわゆる核家族化であり、孤立死も増えてきた。家族と共に住んでいれば

こういった問題は無かったはずであるが、今日のように家族が成立しない社会ではこれから孤立死が急増する。裕福な人は老人ホームに入れるが貧民はそのお金もない。家族や親せきをまとめる資金がないのである。資金が無くとも家族愛があれば助かるのであるが、どういう訳か孤立死する人には他人に助けを求める気が無いのが不思議である。

やはり一家の主婦はできるだけ家にいて家族の健康や成長に配慮したほうがいい。特に子供が小さい時はできるだけスキンシップを取り遊んであげるとよい。保育園に預けて仕事に励む主婦が多いが、子供の成長にとっては好ましくない。しかし現実にはきびしく経済成長も望めない昨今の世の中では主婦も働かざるをえず、何がしかの収入を家族の生活の足しにしなければならぬ。やはり隣家の子供がマウンテンバイクを買ってもらえば、買ってやらなければならない。主婦は家族愛の中心的位置を占め、父親の収入を最も有効に再配分して家族の健全な生活を守る役割をはたす。主婦の力は再評価しなければならない。この力が発揮されている家庭では家庭内暴力や不登校、いじめといった現代がかかえる諸問題は起こらない。そして一家の長は家庭内の仕事を妻に任せ仕事に専念できる。でも実際にはこんな良妻賢母の主婦はいない。人間というものほどどこかに欠陥や弱点をもつものである。

一家の主の経済力は絶大である。妻や子供は父の働いて得た収入で生活しなければならない。家族は父の意向に従って生活せざるを得ない。父親の権威と経済力は一家のさきえであり、父親の意向は家族の方向性を決定する。しかし妻が仕事に出始めると、主婦業がおろそかになり、家庭はうまくいかないことが多い。子供は学校から帰っても誰もいないとわかれば、慌て

て帰ることもなく寄り道をする。主婦のいない家は子供にとってポッカリ穴の空いた寂しい空間である。寂しさをまぎらわすために友達の家に行く。妻が経済力を持つと家族の力関係が変わってくる。妻の発言力が強くなり、もはや夫の言うことは聞かない。離婚や家庭内の齟齬が起りかねない。

家庭内に経済力が分散すると家族でも顔を合わせる機会が減る。人間というものは孤独に弱い。一つ屋根の下にしながら顔を合わせる機会が少なくなると、意思疎通がうまくいかなくなり、やがて別居や離婚につながっていく。夫婦というものは一緒に助け合って初めて家族である。結婚には色々な形態があるが、離婚だけは避けたいものである。

(2) カード社会

一昔前はカードなど無く全ての決済が現金や金・銀であった。しかし今日ではほとんど全ての決済がパソコン上で処理され、クレジットカードやキャッシュカードが用いられる。カードを持たない人はいない程にカードは生活に定着している。家庭においても家族がどれ位貯金をもっているのか借金をもっているのかわからない。預金通帳では把握できないお金の流れができていく。カードの中にどれだけの貯金や負債があるのかわからない。

カードを持つとついつい高額なものを買ってしまいがちである。支払が分割であったり後払いであるから気が大きくなる。主婦はいつの間にか買すぎてローン地獄に落ちかねない。主人は早く気が付けばいいが、家のクローゼットにブランドのバッグやコートが増えていけばおかしいと思わなければならない。カードは全ての貯金や現金を隠す。一枚のカードに1億円の負債や貯金があってもわからない。主人は早く

気付かなければ大変なことになる。カード社会はちょっと間違えば家庭崩壊につながりかねない。

カード社会の便利な点が多い。電車に乗るにもまたタクシーに乗るにもカード1枚差し出すだけですむ。財布から小銭を出す手間が省けて助かる。しかし手先の器用さは失われる。不器用な老後を心配する人もいる。カードは現金と同じ働きをするから紛失やスキミングに注意を要する。便利なものには必ず落とし穴がある。財布はカードによって現金が減り軽くなるが、取扱いは要注意である。財布を落としあわててカード会社に電話するが心配でたまらない。後日派出所から電話があり、届出を確認するとほっとする。

とはいえ、金や現金に勝る所有の満足(快樂)はない。1億を引出せるカードを持つよりも現金1億円を手にする方がはるかに楽しい。人は安全のために預金したりその他の有価証券に変える。満足を安心に変えて価値の保全を計るのである。人間は太古の昔から貨幣で取引してきたが、今日のような電子マネーの時代には、現金に手を触れることなくカード決済されるので支払の実感が沸かない。キャッシュレス時代の道徳哲学は安いからといって余り必要でないものまで買わないことである。

(3) いじめ

庭で放し飼いにされた鶏の一匹がお尻におできをかかえ、しかも出血している。他の鶏はこの鶏をかばうどころか容赦なく嘴でつく。ものめずらしいのかも知れない。多数の鳥がつつくものだから傷を負った鶏はかわいそうにうずくまってしまう。放っておくと死に至るだろう。だから鳥の集団飼育には嘴の先をカットする。この鶏の集団行為は鶏自身は気付いていないが

一種のいじめである。人間も動物であり様々ないじめがある。しかし死に至るいじめは理性によって妨げるはずである。

今日の学校教育ではいじめが日常化して、毎日のようにいじめによる自殺が増えている。お隣のアメリカでは反いじめ法も成立し、いじめによる自殺は現代社会の病根である。少し前の日本では生活は楽ではなかったが女性が家を守り、子供の成長を楽しむ姿が見られ、少なくとも今日のような陰湿で悲惨ないじめはなかった。一つのお菓子を三つに分けておやつを食べる空間にはいじめの感情が沸くすまがないのかもしれない。

豊かで監督のゆき届かない公立学校では、動物界と同様に弱者や貧者あるいは優秀者や富者までもいじめの対象となり、自殺に追い込まれたり暴力を受ける。しかし私学においては事情が違ふ。先生は教育者であり児童と一緒に昼食を食べたり、自分の授業が無い時は絶えず裏庭やトイレを巡回し、不審な動きをする生徒に注意する。だからいじめは未然に防止される。ところが公立学校では先生は教育者である前に公務員であり、教育は二の次である。まず自分の地位を確保し、教頭、校長、教育委員会へと階段を登っていく。そのためにはいじめや暴力行為はあってはならないから陰蔽する。いじめを予防する見回りといった簡単な行為も彼らにとっては余分なただ働きに思えるのである。公務員は与えられた仕事しかやらない。いや与えられた仕事すらしない人種である。そのうち体育会系の団塊の世代のボランティアを募り、見回りをやらせかねない。

その点私学の先生は教育者であり、あらゆる面で生徒の面倒を見る。学校に暴漢が乱入しても、身を挺して生徒を守る。ところが公立学校の先生は真先に生徒を置いて逃げ出す。そんな

先生に可愛い子供を預けられない。だから近年私学の人気が出て来たのである。確かに授業料は高いが我子を守ってくれる先生に教育を受けることを選択するのである。でも庶民は私学の良さはわかって高い授業料が払えないから仕方なく公立学校で我慢する。公立学校ではいじめを受けない処生術が必要である。先生は見ても見ぬ振りをするので助けにはならない。子供にとっては何と残酷な社会であろうか。確かにいじめは一部の生徒の集団行為であるが、彼らにとにかく係らないように学校生活を過ごさねばならない。いじめを受ける側には学校以外の生活の場が無いのである。大人はそんな学校なら行くと言えるのであるが、生徒にはまだその判断がつかない。親は子供の様子がおかしければ子供を学校に行かせてはいけぬ。相談相手がない子供がいじめの犠牲にさらされる。特に共働きの家庭の子供は要注意である。いじめられる側もいじめられる側も共働きの家庭が原因である場合が多い。

公立学校ではどんなに優秀な教育者を送り込んでも、特に都会においてはやがて公務員化する。あるいは有能な教育者は公立学校を飛び出し、私学に流れる。ということは、公立学校の存在理由が無いのである。公立学校は私学化し、教育費の不足分は国が負担すればいい。今日の大学方式をとればいい。教育に情熱をそそぐ学校には補助金を多く与え、成績の上がらない学校には補助金を減らす。この方式によって先生方は教育や部活動にがんばらざるをえない。もちろん、道徳（博愛・尊敬・愛国心）は必修科目である。

(4) 虐待

近年親の子供に対する虐待が増えてきた。豊かな世の中にありえない社会現象である。昔は

食料難からやむをえず我子を手にかけてたが、今日ではその必要性もない。母親の母性に変化が起きたのである。その誘因は豊かさと自由である。母親にとって子供は可愛い宝物であるが、時には泣き、時にはぐずり言うことを聞かない。母性は子供の邪魔な存在の前に負けてしまう。中でも豊かな家庭では起こりにくいが、貧困な家庭に勃発する。それは貧困であるという現実が子供の虐待に向けられるのか？ 貧困から逃がれるために働けばいいのであるが、怠惰な故に子供が邪魔になる。母親の母性は怠惰と羨望の前に消滅してしまう。彼女にとっては子供の命よりも好きな男性やお金の方が魅力なのである。人類に受け継がれた母性のDNAは崩壊し始めたのか？ 豊かさ（格差）は母性さえも侵蝕し始めたか？ 母性の危機である。それなりの生活レベルの中で子供を育てられるはずである。

どおしても子供を手離さなければならない時は、手を掛けるのではなく赤ちゃんポストに預ければよい。ドイツなどでは成功しているが、日本ではまだ普及していない。しかし子供に恵まれず養子として迎えたい夫婦は沢山いるので、殺す位なら育ての親の下で裕福に暮らした方がよい。少子化の社会で一人でも子供を助けなければならない。それには近所づき合いの途絶えた町に何らかの連絡の輪を広げなければならない。狭小住宅の密集した集合住宅では隣は何をする人ぞと言わんばかりに、他の住居には無関心である。無関心も時には干渉されるよりは気楽でいいが、何か問題が生じた時に対処できない。日頃の声かけだけでも大切である。

育児ノイローゼや精神的疾患から子供に手を掛ける場合は、これはなかなか防げない。精神科医も予想できない場合が多い。ある時突然豹変し、我子を殺す。精神の世界は不可解なこと

が多い。この現象は現代になるほど多発する。豊かさや自由は精神までも自由にふるまわせるのだろうか？ そこには自制心という美德は完全に踏みつぶされている。自由は人間のDNAまでも組替えてしまったのか？

このような現状を悪化させる最大の要因は公的機関の無責任さである。公的病院に虐待幼児が運び込まれても、当該機関は母親が認めない限り警察に通報しないところが多い。手続きやわずらわしさを嫌がって通報しない。医師や看護師が見れば虐待の跡は一目瞭然である。そんな親に限って献身的に看護する。公務員も見ても見ぬ振りをせず、わずらわしさを恐れず社会的役割を果たさねばならない。

V 感情における道徳哲学

(1) 怒り

まず怒りを鎮めよとキリストは言う。キリストばかりの社会ならめごとは起こらないだろうが、世間は自己主張と衝突、そしてそこから発生する様々な怒りの坩堝である。この坩堝から嫉妬、憾み、敵意が生まれ、社会は混沌のカオスと化す。各自が怒りを抑える理性を持っているから社会は成り立つ。文明が進歩すればする程怒りは豊かさの前におさまり、どうにもならない怒りは裁判所で処理される。文明国では豊かさや便利さのお陰で怒りは鎮まるように思われるが、そうとも限らないのが人間の諸感情である。貧富の格差、能力の格差と、様々な格差にいきどおりを覚える人もいれば、自分の境遇に満足する人もいる。どちらかと言うと格差に不満を持つ人が多い。これだけ汗水たらして働きながら、わずかししか得られない報酬に怒りを覚える人もいる。彼は他人の富をうらみ、よからぬことを考える。彼の怒りは犯罪につながりかねない。現代はこういった感情を持つ人々

を多くかかえているから危ない。

怒りは一時の感情であり、時間が経つと薄れるものである。怒りは収まるから人は生活できるのである。怒りが留まり発散させることがうまくない人は爆発し、とんでもないことをしでかす。怒りは積もりに積もると、とりかえしのつかない方向に爆発するからこわい。

歩行中いきなり通行人になぐられると腹が立つ。なぐり返してやりたい気持ちにかられるが、気持ちを抑えて身を守らなければならない。相手はす早く逃げてしまう。なぐられた本人は打撲の痛さよりも怒りの量の方が大きい。何故私になぐられなければならないのか？ 私は犯人と何の関係もないのに。でも考え方を変えれば、打撲で済んだのだから運が良かったと思えば、怒りも収まる。運が悪ければナイフで刺され死んでいたかも知れない。近年無差別殺人が多い。そんな不運に比べれば一発なぐられた位なら、諦めもつく。怒りの道徳哲学は諦めることである。今も昔も変わらない。

ブランドのバッグや傘は中古でもネットオークションで簡単に売買できる。だからよい物はちょっと油断すると他人にもって行かれる。ブランド品は気を付けなければいけないと思いつつ、ついつい忘れてしまうものである。思ってもいない天気回復に傘を持ち帰る習慣を忘れてしまう。めっちゃくちゃやしい。

気が付いてみるとパソコンのオークションで自分の傘を探してみる。見つかると更に腹が立つ。しかしたとえ自分の傘だとしても取り返せないで更に腹が立つ。

忘れ傘のことはもう忘れて、次はブランド品をやめてノーブランドの傘を持って出ることしよう。並の傘なら忘れてもそう残念がることもない。

人によって怒りの程度は千差万別であるが、

富者など怒りの度合が少ないのが通例である。余裕があれば他人の無礼にも寛容になれるのだろう。富者はウェイトレスがブランドの背広にコーヒーをかけても怒らない。見えっばりは汚された背広に対して法外なクリーニング代を要求する。乏しい財布の持主は心のバッグまで小さくなるものなのか？ 貧民でもコーヒーをこぼされて腹を立てない人は、本当に人柄の良い人である。

富者にもかかわらずコーヒーをこぼされた位でクレームをつける吝嗇な人も多い。お金がありながら吝嗇な人は周りから嫌われる。でも本人は一斉気にしない。お金こそステイタスと思い込み、通帳の残高末尾に零が増えることに一喜一憂する。お金さえあれば何をしても許されると思込むやっかいな人種である。彼らはボランティアや寄付から全く縁遠い存在である。だから周りの人から後指をさされる。彼らが社会習慣を無視して貯め込むから日本の経済は不況を脱することができない。吝嗇な富者こそ周囲の貧民の怒りを買うのである。

(2) 快楽

快楽という言葉が公然と使われるようになったのは、ロックの『人間悟性論』(1689年)ではなかろうか。それまでの中世的なキリスト教社会においては快楽はむしろタブーであり、禁欲主義的な道徳哲学が支配していた。しかし人間の本性を無視したタブーは、おいしいもの、贅沢品、また自由な活動に押しつぶされ、人々は快楽を求めて経済活動に励むようになる。農奴は自由を領主から買い、貿易商は高価な宝飾品を領主や地主に売る。彼らの欲望は封建的枠組をこわし、欲望の充足すなわち快楽の追求が人間生活の基本理念となる。貧困よりも豊かな方が満足の度合が大きいので、人々は仕事に励

む。人々は貧困から脱するために様々な努力をして富を増やし、満足を得ようとする。快楽とは満足量でもある。

快楽はしばしば苦痛と比較される。ロックが言うように人間は苦痛を避けて快楽を求める存在である。さらに快楽の中でもより大きい快楽を求める動物である。より大きい快楽を与える物やサービスを選ぶ人間の性向より功利主義が芽ばえる。近代思想の原点はベイリーやベンサム功利主義思想である。この思想が自然法思想とともに資本主義をささえる大きな近代思想に成長するのである。道徳哲学も従来のキリスト教的なものよりも、人間により満足を与えるものが選ばれるようになる。禁欲的なキリスト教的道徳哲学は姿を消すことになる。

人間はロボットではないから空腹を満たしたり、寒ければ上着を着なければならぬ。こういった感覚的快楽を得るためにまず働かなければならぬ。労働は苦痛とも考えられるがこれを避けることはできない。労働の効率を上げるためには頭脳労働やスキルをみがかねばならず、そのためには若い間は学校に通い勉強しなければならぬ。多大な努力無しには大きな快楽はえられない。だから道徳は勤勉を教える。大きな快楽を得るためには大きな努力が必要なのである。

そのように考えると快楽を得るには多大な労苦が要求される。快楽はほんのわずかの時間しか持続しないということがわかる。料理にたとえれば、おいしい御馳走を食べるのは一瞬であるがそれを作る手間は何日もかかっている。手間を惜しむと味は落ちる。人生の大部分は労苦もしくは苦痛なのかもしれない。しかし苦痛を嫌がってばかりいられない。各人は比較的自分に合った仕事を探し努力しなければならぬ。労苦の嫌いな人には生きる権利もない。労苦が

趣味であったり、生きがいである人にはもってこいの社会である。

しかし余りに大金を手にするとお金で買えない快樂は無くなり、一日を何についやせばよいのかわからなくなり、ゆううつになる人も多い。人は目標をもって行動する。家が欲しいと思えば営業の成績をあげるように努力する。しかし何の目標もなくなれば、行動する気力も失せて、酒やゴルフで気を紛らわす。彼の心は空虚であり、むなしく、一日が非常に長く苦痛なものとなる。快樂も度を越すと苦痛に変化する。ゆううつや苦痛をまぎらわすためにカジノや競馬に没頭する。あるいはマリファナや薬物に手を出してしまう。

(3) 思いやり

動物には親をみとる本能は無いが、人間には世話になった両親のめんどうを看る気持ちが強い。平均寿命が短い時代にはそんな心配もなかったのであるが、食事や医療が進歩すると介護や世話に追われる。人間は思いやりの動物である。中には親のめんどうを看ず、ホームに預けっぱなしの親不孝ものも多い。だから福祉関係の税金がふくらみ、国の財政を圧迫する。自分の親は自分で看るといふ道徳が確立していなければならない。

思いやりは愛情や博愛、助け合いの原点であり、社会生活の潤滑油である。このオイル無くして人間生活は成り立たない。電車の中で座って雑誌を読み、ふと目を上げるとそこに老人が立っている。「どうぞお座り下さい」と言って席を立つ。老人は笑顔で思いやりに感謝し席に着く。心温まるコミュニケーションである。しかし気をつけなければならないのは白髪で齢そうに見えても意外と若い人がいる。こういう人には声を掛けられない方がよい。相手は喜ぶどころ

か愕然として肩を落とす。

名所・旧跡の前で美女がカメラを持って佇んでいると、どこからともなく声が掛かり、たちどころに二、三枚の写真が撮られる。しかし齢老いた老人や身障者がカメラを持って佇んでいても、誰も声を掛けず通り過ぎていく。何と思いやりのない社会であるのか。中には心優しい人が声を掛け、てきぱきと被写体の注文に応じて写真をとってあげる。まんざらでもない社会である。こんな心暖まる人は思いやりのある好青年である。彼にはきっといいことがあるであろう。

しかし経済社会は一円でも安いものを求め、少しでも品質のよいものを求める。いわゆる経済競争である。経済競争力を追い求めなければならぬ過酷な社会である。青年の思いやりも競争相手の企業には行われることはない。企業競争はいわば経済戦争であり敵に塩を送ることはまれである。こんな競争社会が嫌な人は学校の先生や公務員にもぐり込む。経済社会には精神的に強い人でないとつとまらない。思いやりの感じられない人がここでは成功する。

逆に企業内では社員の足の引っ張り合いの組織は長続きしない。うまくいっている企業は必ず社員の交流や競争もうまくいっている。社員同士が敵対するのではなく、協力し合い商品を開発する。協力は思いやりの最大の美德であり、この美德が会社を成功に導く。自分に与えられた職域をもちろんこなし、隣接の職域も見すえて仕事する。だから商品の製造ラインにおいても欠陥が出ても次の担当者が気付き、欠陥を補填する。だからメイド・イン・ジャパンは不良品が無い。

この思いやりが欠除すると家族や社会が崩壊し利己主義がはびこる。幸いにも人間は家族愛に満ちた動物であるから、内戦状態においても

家族を守り社会の再構築に向けて努力する。極貧であれ豊かであれ家族愛は変わることはない。家族愛は社会を形成し、社会は国家を形成する。しかし家族愛が強すぎると他国の領土や資源を獲得しようと戦争を起す。この過程が人類の歴史であった。

軍事的専制国家であればある程為政者は身内のために、また身の危険を回避するために不正な蓄財をする。莫大な財貨は絵画や財宝にも支出され栄華をきわめる。専制の度合が強ければ強い程人民は貧しく、為政者は贅沢さんまいである。しかし今日ではこんな為政者は世界の非難をあげ、国連軍の派兵におびえなければならぬ。

民主主義国家は逆に為政者は意外と貧しい。民主化が進めば進むほど不正蓄財はできない。だから為政者はお金持ちが国家のために奉仕するという形をとる場合が多い。不正蓄財はマルサによって厳しくチェックされる。

(4) 嘘

嘘をつく人は嫌われる。しかし小説や漫画の世界では嘘は大きければ大きい程賞賛される。大きな嘘は小さな嘘よりもおもしろいからである。おもしろい小説は映画やドラマになりお茶の間の関心を集める。主人公や脇役は、小説のイメージを演技に取り込み、大きな嘘をさらに大きくして、観客の目を惹く。この種の嘘はいわゆる虚業の世界の話であり、悲しくもないのに涙を流したり、おもしろくもないのに笑い顔をつくる。しかし実業の世界では嘘は契約不履行で訴えられる。ドラマの主人公は小説の主人公以上のおもしろさや悲しみを表現することに没頭する。いつしか小説の主人公になりきり、嘘の世界にひたる。すると自分はいつのまにか小説の主人公と思込む。観客はドラマの主人

公のかっこよさに惚れ込んでしまう。ファンはしばしば芸能人とドラマの主人公を同一視してしまう傾向がある。この錯覚がさまざまな問題をひきおこす。ファンの追っかけやストーカー的行為、贈物や現金の供与、と数えればきりが無い。中には芸人に陶酔する余り、多額の借金に応じるが返却されることはまれである。ファンも芸人の嘘をしっかりと認識して対応しなければとんでもないことになる。芸人の芸を楽しめばいいのであって芸人の人間性まで同一視しては危険である。一流の芸を身につけているからといって通常の人間性を備えているとは限らない。えてして両者は反比例する。至芸であればある程最高の嘘であり現実から乖離しているのである。

歯医者嫌いな子供を歯医者に連れていくのは大変である。母親はあれこれ考えて、キャラクター人形を買ってあげると嘘について、子供を連れ出し、無言で歯医者に連れていく。子供は話が違ふとだだをこねるが後の祭りである。治療が終わる帰り道に母はスーパーでおまけ付きのグリコを買ってあげる。子供は歯医者に行ったことも、キャラクター人形を買って貰えることも忘れてはしゃぐ。母親のすばらしい嘘である。

大型電機店の開店セールには早朝から行列ができる。先着何名様に限りパソコン10台を8割引と広告に銘うってある。非常にわかりやすい案内である。しかしミニスーパーやドラッグストアなどでは特売商品の数量を明記していない広告が多い。客は特売品を目当てに売場に急ぐが、すでに売切れの言訳が貼ってある。言訳すらない所が多い。こんな場合客はがっかりすると同時にだまされたと思う。つまり特売品はたして売られていたかどうかも怪しい。たとえあったとしても数個なのかも知れない。客は

広告の嘘に気が付き、この店には二度と来ないだろう。

戦争ほど嘘の多い人間行動はないだろう。相互不可侵条約や平和条約を無視して戦争を仕掛けるのは日常茶飯事である。ここでは嘘は戦争に勝つために正当化され、むしろ奨励される。A地点を攻撃するという誤報を流し、B地点を攻撃する。そのためには敵国にスパイを送り諜報活動に専念させ、正しい情報を得ようとする。暗号の解読や盗聴器を仕掛け敵の動きを知ろうとする。スパイ活動は平時においては立派な犯罪である。しかし戦争に負けると戦争を起こした人は戦犯として処罰され、敗戦国には領土の割譲や多額の賠償金が請求される。だから戦争においてはどんな嘘についても勝たなければならないのである。

嘘と真実がぶつかればどちらが勝つであろうか。誰もが真実と答える。しかし現実はいましばしば嘘がはびこる。年利10%の投資物件を薦められるとついつい買ってしまうお年寄りが多い。高い金利に騙される。常識に照らしてみてもこんな高率の金利が払えるはずがない。

アメリカでは患者に真実の病名を告げる。しかし日本では末期のがん患者には真実を告げな

い場合が多い。本人の死に対する恐怖や不安を考え、医者は親族と相談の上で患者に嘘の病名を告げる。嘘が患者の生きる希望を勇気づけ、真実を上回る元気を与える。逆に真実を教えてほしいという患者も少なくない。余命を知りその間に自分のやり残した事をやり抜く。なかなか意志の強固な人でないとできないことである。彼の生きざまはしばしばドキュメントとしてテレビで取り上げられお茶の間の視聴率を獲得する。

状況証拠しかない容疑者に真実を聞き出す場合、刑事がしばしば使う手口が嘘の証拠である。被害者の背中につきささったナイフに指紋はないのに容疑者の指紋がいかにも残っていたように言う。容疑者は手袋をしていて殺害したのだから指紋など付くはずがないから、否認する。刑事は執拗に主張する。余りに主張するので容疑者はもう一度思い出してみた。確かに手袋をしたのははっきりと覚えているが、手袋をする前にナイフの指紋を拭いたかどうか記憶がない。容疑者のあいまいな記憶によって彼はやがて真実を語り始め、殺人を認める。嘘が真実を引き出したケースである。